青蘿発句注解　一

富田志津子

はじめに

栗の本青蘿は、中興期俳壇の宗匠である。加古川に居を構えて、そこで門人を育てた。栗の本の一門は、播州の一大俳壇となり、但馬・淡路にも勢力は広がっていった。青蘿は、中興名家の一人として、常に蕪村とともに指折られている（『蕉門中興六家集』『新五子稿』などによる）。この人の作品が、集められ、整理され、世に出てもっと評価されてもよいと、私は思うのである。

しかし、青蘿は、自ら俳書を出版することは少なかった。加古川に定着してまもないころ、芭蕉の句碑を建立して出した記念集『蛸壺塚』（明和五年刊）、晩年に都に上って、几董、暁台ら、京住の俳人と歌仙を巻きそれを刊行した『都六歌仙』（天明七年刊）、重厚との両吟歌仙二巻所収の『長月の夜』（天明頃）が知られる程度である。もっぱら門人が記念集や追善集を出版するのを支えていたようだ。

そんな青蘿であるから、世に知られている作品は多くない。発句は、青蘿の没後に、栗の本二世の玉屑が、『青蘿発句集』（寛政九年刊）を出版した。そこに出る発句はおよそ六百句である。同時代の蕪村の発句二千八百余句（講談社『蕪村全集』による）には、はるかに及ばない。

本稿は、青蘿の発句作品の中から、いくつかを選んで、注解と鑑賞を行うものである。シリーズとして、何回かに分けて続けたいと思う。今回は、その初回ということで、青蘿の極初期の作品をとりあげた。製作年代が推定できる発句なので、彼の経歴と重ねながら検討していく。当時の俳号は、「山李」あるいは「山里」であるが、注解の文では「青蘿」として統一する。

一

青蘿は、江戸で生まれ育った。前橋藩（のち姫路藩）酒井家の家臣の家に生まれ、同じく酒井家家臣の家に養子に入っている。彼の出自を語るとき、酒井家家臣、松下高徐が家中の実話や巷談を書き留めた聞書『摘古採要』（天保八年序）がしばしば引用される。もと酒井家藩士であり、若くして浪々の身となった青蘿の、俳諧師以前の時代を語る、貴重な記録が、同書である。

『摘古採要』三編尾巻に、第十一話「山梨坊青蘿の事」として、青蘿の伝記と逸話がみえる。必要な部分を要約すると、青蘿は松岡門太夫三男に生まれ、竹沢（あるいは武沢）氏の養子となり竹沢鍋五郎として酒井家に仕えた。宝暦五年、十六歳で御勘定人として出仕している。しかし、同九年に「身持不慎」のために「姫路引越」を言いつけられ、同十三年に「永の御暇」を言い渡された。このことにつき、『摘古採用』には鈴木念兵衛の文章がそのまま書き留められている。以下のようである。（旧字体は現行の字体になおし、句読点と濁点を補った。また必要に応じて、ルビを振っている。青蘿の発句がふくまれている場合は、傍線を付した。以下同じ）

竹沢鍋五郎は其母の訴に依て、永の御暇被下候。その故は、此鍋五郎、元来若気の誤りにて博奕に耽り毎夜深更に帰り来りければ、母も人もいろ〳〵異見を加たれど聞入れず。鍋五郎廿二三歳の頃、右の母、姫路御用場へ訴へ出候て、母の異見を用ひざる致方宜しからずと直に訴へ出候により、永の御暇被下候て、支度出来次第立退候様被仰渡候に付、其節朋友の許へ発句を致し配りて晦乞に廻り、母をともなひ立退たる也。珍敷御暇の被下やうと、人々其節申候由。其ときの発句に

ありたけは鳴て渡らん川千鳥

と申せしと也。親類はじめ朋友に晦乞致すとて、いか様に渇命に及候とも二君へは仕へ申間敷と誓ひて出候よし。その後、所々遍歴致候て、剃髪仕、名を青蘿と改、加古川大庄屋中谷慶太郎方にて世話に相成、久しく加古川に住居す。

つまり青羅（鍋五郎）は博奕にふけって、養母の訴えによりお役御免となり、その養母と共に姫路立ち退きとなった。そして諸国遍歴の旅に出たのである。その後、加古川の大庄屋、中谷慶太郎の世話で、加古川に住まいした。

いつ俳諧に入門したのか。青羅の追善集『水の月』（寛政三年序、玉屑編）に玉屑の「青羅居士終焉記」が載り、それからも青羅の俳諧師以前のことがわかる。以下に引用する。

亡師は、はりまの国手柄山のふもと姫路の城主酒井候の臣なりしが、官袴の暇を退かれて、年月仕へなれし石松が剃刀に髻を切捨、山李坊令茶と呼。稚き頃より、風雅に志ありて、十三歳の時東都の玄武坊が門に入。其後、いくその人を師とし、世々の俳諧千変万化すといへどもこゝろざしを失はず。

この文章から、青羅が十三歳の時より、江戸で玄武坊に俳諧を学んでいたことがわかる。たしかに、その後栗の本門の俳書に、度々玄武坊の発句作品が見えている。

青羅は諸国遍歴の後、加古川に住んで俳諧師としての生活をおくり、大宗匠となって生涯を全うした。『摘古採要』の松下高徐によると、安永七年に姫路徘徊が許され、天明四年には姉と実兄松岡儀之進の願いによって久離が解かれた。

二

青羅の俳諧入門は十三歳だというが、そのころの作品は管見に入らない。玄武坊周辺の俳書をみても「山李」あるいは「山里」の号で、青羅らしい者は見当たらない。別の号であったのかも知れない。

青羅の作品でもっとも早いと考えられるのは、前掲『摘古採要』所収の「ありたけは鳴て渡らん川千鳥」である。まず、この句から注解していくことにする。（注解する発句には、便宜上、通し番号をつけている）

① ありたけは鳴て渡らん川千鳥

冬（千鳥）　出典『摘古採要』

【訳】千鳥が河原に群れて、鳴き交わしている。自分もそのように、思いっきり泣いて、そしてあきらめて群れから去って行こう。

【注】この句は、『摘古採要』によると、酒井家から罷免されて姫路を立ち退くとき、友人たちに暇乞いに廻りその時に配った、とする。宝暦十二年、二十三歳のときのことであった。俳諧は、江戸で学んでいたので、別れの発句を詠むのは難しいことではなかった。

千鳥といえば、「友千鳥」「群千鳥」といった言葉があるように、群れを成している。「川千鳥」は川辺に集まる千鳥。自らをその中の一羽に喩える。

千鳥の群れから一羽が去って行く、いや去らねばならない。今、思う存分鳴いて、そして川を渡って去って行こう、というのである。千鳥の縁で「鳴く」「渡る」の語があるが、「鳴く」には青蘿みずからが「泣く」を掛けている。思い切り泣いて、そして潔く去って行こう、というところに、自らの決意がにじむ。

青蘿の罷免は、本当に博奕に耽ったことによる「身持不慎」だろうか。この句から、理不尽な退去命令に対する憤慨や、しかしどうにもならぬというあきらめが感じられるのだがどうだろう。「珍敷御暇の被下やうと人々其節申候由」と『摘古採要』にあるように、周囲も不審に思ったという。

青蘿は、その後、諸国遍歴をする。『摘古採要』によると、母を伴って姫路を退去しているのだが、旅にまでその母を伴ったかどうか、わからない。老母に旅は無理だったと思える。二年後の明和元年に母は亡くなり、加古川の光念寺に葬られている（過去帳）。

青蘿が姫路を去ったのが宝暦十二年冬、その翌年頃、彼は加賀に闌更を訪ねたらしい。『水の月』に載る闌更の青蘿追悼句の前書に「三十年近きいにしへ、加の金城の二夜庵に旅笠をぬぎて、うれしさに寝られぬ夏の川辺かなとありける筆の跡、今に残り、猶悲しくて」とあり、単純に三十年前とすると姫路退去の翌年になる。その頃は、闌更はまだ二夜庵を開庵していないが、闌更の住まいを訪ねた、と考えてよいのだろう。川辺にある闌更の住居で語り明か

したのである。そして、その年に闌更が刊行した『花の故事』に青蘿の句が見える。前掲「うれしさに」の句とは別のものである。

この年に、青蘿が金沢の闌更を訪ねたとすると、青蘿は二十四歳、浪人になった直後であった。俳諧師として独立するべく諸国遍歴していたのであろうか。闌更は青蘿より十四歳年長である。同じく美濃派蕉門ということで、青蘿は闌更を訪ねたのかもしれない。闌更は、それを迎え励ましたのであろうか。すべて推測の域を出ないが、とにかく、青蘿と闌更は生涯を通して親密な交流を持ち続け、それは青蘿が没するまで続いた。晩年には、ともに二条家俳諧の宗匠となっている。

「うれしさに」の句を②、『花の故事』所収の句を③として、以下に注解する。

② うれしさに寝られぬ夏の川辺かな

夏　出典『水の月』闌更の発句の前書

【訳】遠路はるばる友を訪ねて来、歓待され、こんなにうれしいことはない。川のほとりの住まいに泊めてもらっても、とても寝られるものではなく、短い夏の夜を語り明かすことだ。

③ 用心にならぬ垣根やむめの花　播州山里

春（梅）　出典　『花の故事』（寛政十三年、闌更編）

【訳】梅の花の咲く垣根は、通る人が愛でて行く。用心のための垣根とはならず、覗かれたり花を盗まれたりして、かえって不用心だ。

【注】垣根を繞らせるのは、他人に家を覗かれぬ用心、他人が勝手に家に入ってこない用心のためである。しかし、垣根のそばに梅があり、それが美しく咲くと、通りがかりの人が立ち止まってそれを愛でる。ついでに家を覗く。また、手折って盗んでいく者もいる。これでは、用心のための垣根がかえって不用心のもとになる。アイロニーがあるが、主題は美しく咲く梅の花である。

青蘿は、やがて播州に戻って出家した。加古川の善証寺東洲和尚のもとで剃髪、「青蘿」の号を授けられた。以下が、それに関する「青蘿居士終焉記」の文章である。

何がしの翁の風流をしたひ、おもふ処の月、見る処の花を友に、心にかゝる隈なく、北海に遊びては南溟を臨み、年の晦るをもよそに春秋を背に負ふて逍遥せしが、一大事因縁あることを知、三十近うして善証禅寺東洲和尚の法窟に入、心鏡を朗にし百尺の竿頭に吟行するに到ると。此時、青蘿と送り玉ふ。四大色心の無常なる事を発明して、後の世をおもはるゝ時峰の松の吟あり。樹下石上に臥し、糞雑衣を身にまとひ、綴鉢に餉を乞ふの修行にもあらねど、浮雲流水のごとく止る所をしらず。

この文章中に青蘿の発句「後の世をおもはるゝ時峰の松」が見える。これは『青蘿発句集』にも長い前書と共に出ている。また同書中、「燈火のおのれもしらぬひかり哉」「けふよりは頭巾の恩もしる身哉」もまた剃髪の折の句である。この三つの句は、出家に際しての青蘿の思いを述べるものであったのだろう。次に④⑤⑥として採り上げる。順番は『青蘿発句集』にならった。

はいかいの道は、例の自問自答の執行より人和のひとつを守るべき
おしへなりとぞ。此道をよくたもつべし、よくたもたんやいなと、
心にこゝろの戒を立て、常に我髪を結びなれし彼石松が剃刀をいたゞ
き、其石の名のかたく、松は千とせの色をかえぬ例しなれば、今月
今日翁の忌日たるをさちに、四十九年の先はいざしらず、廿九年の
罪をあらためんと、世の中よかれの楽坊主とはなりぬ

④　けふよりは頭巾の恩もしる身哉

冬（頭巾）　出典『青蘿発句集』

【訳】出家した今日からは坊主だ、頭が寒い。頭巾の温もりがありがたく身に染みるだろう。それと同じく、人

の温情も深く感じる自分でありたいものだ。

【注】剃髪して坊主頭になった自分を詠む。「頭巾」は、主に老人や僧が、防寒用に被った。

炉一つむすびて、月雪に人をもふくる処とし、さらに世の富貴と車
馬の誼すきはしらざる也。こはもとひとりを慎めてふひじりのふる
ことをこゝろざしとす

⑤ 後の世を思はるゝ時峰の松

雑

出典『青蘿発句集』

【訳】剃髪して質素な暮らしをする中、ふと、自分の死後のことを思う事がある。峰の松のような、孤独でも高邁な生き方をして静かに一生を終えたいものだ。

【注】前書の「炉ひとつむすびて月雪に人をもふくる処とし・・・」は、茶の嗜みがあったのか。一服の茶で友をもてなし、風雅を共にする。彼の住まいは、そんな静かな庵であった。そこでは、『大学』の「君子は独りを慎む」が座右の銘。

⑥ 燈火(とうしび)のおのれもしらぬひかり哉

雑

出典『青蘿発句集』

【訳】燈火は、自分で自分を見ることすらない。それでも、人が居ようが居まいがいつも凛として周囲を照らしている。自分も見習いたいものだ。

【注】⑤の句の前書にある「ひとりを慎め」は『大学』の「君子は独りを慎む」で、それを実践しているのが燈火であろう。誰もいない所でも、周囲を照らし続ける。自己を顧みることもない。そういう生き方を手本としたいのである。

④⑤⑥は、剃髪時の青蘿の心境を述べているのであろう。どれも道歌のようである、とくに⑤⑥は、季語もなく、禅問答のようで、解釈が難しい。

「青蘿居士終焉記」によると、青蘿は加古川で剃髪した後も行脚している。「樹下石上に臥し、糞雑衣を身にまとひ、綴鉢に餉を乞ふの修行にもあらねど、浮雲流水のごとく止る所をしらず」と修行の旅を続けた。そして、やがて加古川に定着する。「いつのほどか訪ひしたふもの、そこに出、爰に来りて、指を折にかぎりなし。（中略）網手引手のたよりよきとて鹿児の巽に栗のえだ葉をわがね縦横五尺ばかりのいほりをむすび、此あたりの眺にめでゝ三眺庵と号しも唯二夜三よの頭陀を休るたよりなりけらし。」と、近隣の人々に乞われて、加古川に三眺庵を結ぶのである。『摘古採要』によると「加古川大庄屋中谷慶太郎方にて世話に相成、久しく加古川に住居す」とある。中谷家に寄寓し、やがて隣に庵を結んだらしい。それが三眺庵である。

三

青蘿は明和三年、粟津義仲寺を訪れ、十月十一日に幻住庵で巻かれた時雨会の芭蕉追善歌仙に出座している。この時には、すでに加古川に定着しており、門人もいた。刊行された『しぐれ会』（文素編、明和三年刊）に、播磨の俳人の発句が二十余りも入っており、その人々が門人であったと思われる。青蘿もまた、発句を奉納している。発句は次のようなものである。

⑥　水鳥や星の中から一あらし　　播磨鹿児川　山里坊

冬（水鳥）　出典『しぐれ会』

【訳】夜、池の水鳥に寒風が吹き付ける。それは、晴れ渡った空の星の中から吹く嵐のようだ。

【注】寒夜の星空と星明かりに見える水鳥を詠む。池の水鳥に北風が吹き付ける。「星の中から一あらし」の表現が、斬新である。

前述のように、明和三年までに青蘿は、加古川で剃髪、当地に定住した。そこで彼の俳諧宗匠としての生活が始まったのである。明和四年に刊行された他門の俳書二点の中に、「播磨山李坊」としての次のような発句が見える。⑧⑨と

する。

⑧　一しぐれ白き国ありかれ尾ばな　　播磨　山李坊

冬（時雨・枯尾花）　出典『一日記』（竹茂編）

【訳】時雨が訪れる白い国、それは、薄原である。冬枯れの薄は白く臥して、それが時雨に濡れている。

⑨　冬がれや池の中にも道がつく　　播磨　山李坊

冬（冬がれ）　出典『一声塚』（東陌編）

【訳】冬枯れになると、本来道のない池の表面にも道ができる。それは、薄氷が張っているのである。

【注】⑧も⑨も、一読しても風景が想像できない。よく考えてから、なるほどと理解出来る。枯尾花の原を「白き国」といい、氷を「池の中の道」とする表現は独創的で、それに気がついて初めて首肯できる。そこに面白みがある。

⑧の句が出る『一日記（ひとひのき）』は、豊後杵築の竹茂が、支考・芭蕉・麦林の朝顔・昼顔・夕顔の句の短冊を埋めて「三顔塚」を築いた記念集である。諸国から寄せられた発句の中に、青蘿と門人の五百枝、五橋らの句が入る。青蘿の句は掲出の一句である。

⑨の句は、『一声塚（ひとこえづか）』の「諸国名録」に載る。やはり、五百枝ら栗の本門人の発句も、ともに出ている。同書は、丹後の東陌が天橋立に、芭蕉の「一声の江に横ふや杜宇」の句碑を建立、蝶夢を尊師として法筵を開いた、その記念集である。

芭蕉没後、芭蕉の墓に詣でようとする人が増え、そうした人が、わざわざ義仲寺まで行かなくてすむように、地方各地に芭蕉塚が建てられるようになった。古い塚は、「芭蕉翁」と刻まれているが、時代が下るにつれて、芭蕉の発句を刻むようになる。墓碑から句碑へと変容するのである（田中道雄「信仰・祭られた芭蕉」『国文学解釈と鑑賞』昭和五一年三月）。句碑の建立は、とくに芭蕉五十回忌、百回忌といった年忌に際して爆発的に増え、幕末には一千

基ほどもあった、と言われている。

『一日記』も『一声塚』もそうした芭蕉句碑建立の記念集である。青蘿は、それに賛同して自分と門人の発句を送っている。芭蕉塚の建立は、当時、蝶夢が推進の第一人者であった。青蘿は、加古川定住の頃から蝶夢と関係が深く、その縁で、一門の句を送ったのであろう。そして、翌年の明和五年には、青蘿自身が明石に芭蕉塚を建立する。

四

青蘿は蕉門俳人である。彼の活動の多くが芭蕉顕彰活動に費やされた。加古川に俳壇を形成してまもなく、明和五年に芭蕉句碑を明石に建立している。

「蛸壷やはかなき夢を夏の月」という芭蕉の句を句碑にして明石の人丸神社（月照寺）に建立したのがそれである。明和五年十月十八日に開眼供養が行われ、蝶夢が京から招かれて導師となっている。青羅は記念集『蛸壷塚』も刊行した。同じく蝶夢が「蛸壷塚願文」を書いている。同書を紐解くと、栗の本門の主要な門人はすでにそろっており、青蘿が加古川に来てまもなく、有力な俳人たちが入門したことが分かる。

さて、『蛸壷塚』に入る青蘿の発句は次の六句である。

⑩　神垣の留主事賑し十万顔　　山李

⑪　炭竈や雪のうへ行夕けぶり　　山李坊

⑫　ちら〳〵と瓦の施主や山桜　　山李坊

⑬　一ツ家の昼寝見へすく青田哉

⑭　白浜に何を見出けん秋のくれ

⑮　入れ物の形リに寝て居る海鼠かな

以下に注釈する。

⑩ 神垣の留主事賑し十万顔　　山李

冬（神の留主）　出典『蛸壺塚』（以下⑮まで同じ）

【訳】神様が出雲へ行かれている十月に、ここ人丸神社（月照寺）では留主ごとの法会で賑やかである。大勢の人が集まり、顔ぶれが揃って、芭蕉句碑開眼を寿いでいる。

【注】神垣は、神社の玉垣だが、神社そのものも指す。「留主事」は、主の留守中に行うこと、飲食である場合が多いが、この場合は句碑開眼の会。「十万」は、「十万億土」「十万億仏土」からきている。この世から極楽浄土へ行くまでにある無数の仏土をいい、「十万」は数が多いことをさす。ここでの十万顔は、たくさんの顔が並んでいる、ということ。

句碑開眼供養には、百韻が十巻巻かれたと思われる。『蛸壺塚』連句はすべて、面八句のみが掲出されており、青蘿は、どれも脇を詠んでいる。これはその「追加」連句で、ここにいたって、ようやく青蘿が発句を詠んだ。連衆は、山李、五百枝、布舟、其猿、文下、用舟、素嶺、雪臂で、栗の本一門の重鎮であったと思われる。

⑪ 炭竈や雪のうへ行夕けぶり　　山李坊

冬（炭竈）

【訳】冬の山里、炭竈も雪に埋もれる。夕方、炭竈から立ち上った煙は雪の上を静かに流れる。雪の白と煙の白、辺り一面、白い世界である。

【注】「当座探題」の句。炭竈は炭を焼く窯。山里にある。そのあたりは、雪深いのであろう。

⑫ ちら〳〵と瓦の施主や山桜　　山李坊

春（山桜）

【訳】山桜が散って、ちらちらと寺の屋根に花びらが積もる。それはまるで瓦のようで、山桜は瓦の寄進者といえようか。

【注】難解。「施主」は、願をたてて、寺社に何かを寄進する人。この場合、瓦の寄進である。この句では、山

桜が瓦を寄進するという。つまり花びらを瓦に見立てているのであろう。⑫から⑮の句は、発句の「四季」の部の末尾に掲載されている。名前は⑫にのみ付されている。

⑬　一ツ家の昼寝見へすく青田哉

夏（昼寝・青田）

【訳】青田のむこうに農家が見える。開けた窓の簾越しに、家族がみな昼寝しているのが見える。

【注】稲が生長して、青々とした葉がそよぐのが青田、初夏の頃である。そばの農家では家中で昼寝している。

⑭　白浜に何を見出けん秋のくれ

秋（秋の暮）

【訳】白砂以外何もない浜が広がる。定家は、花も紅葉もない浜の苫屋で見る秋の暮れがよい、と詠んだ。このような白浜の秋に、何を見出したのだろう。

【注】『新古今集』三夕の歌の中で、定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり　浦の苫屋の秋の夕暮れ」を踏まえ、眼前の白浜の秋を詠んでいる。

⑮　入れ物の形リに寝て居る海鼠かな

冬（海鼠）

【訳】海鼠を食べようと買ってきた。どんな器に入れて置いても、その器の形になって静かにしている。まさに眠っているようだ。

【注】　海鼠の生態をよく表している。くにゃくにゃと器の形にあわせて体形を変える。もうすぐ食べられてしまうのだが、慌てず騒がず「寝て居る」ように見える。

終わりに

今回は、青蘿発句注解の第一回目として、青蘿の初期の発句を採り上げた。青蘿の俳諧は、江戸で玄武坊に入門したといわれているものの、その頃の俳諧活動はまったくわからない。玄武坊の周辺で詠んだ作品は管見には入らないのである。わずかに、若い頃の経歴とともに伝わる発句があり、それらを加古川定着当初の発句とともに、今回注解した。

青蘿は、当時の俳諧師の多くがそうであったように、蕉門である。芭蕉を敬い、芭蕉を顕彰し、自らの俳諧を蕉風と唱える。彼の作品は、難解な語や表現を使用しない。生活の中に、風景の美しさや生き物のおもしろさを捉えるのが彼の「蕉風」である。その作風の中で、第三者をはっとさせる鋭い感覚を感じさせられるものも少なくない。それが、青蘿の俳諧の特徴であり、青蘿を大宗匠に成長させた由縁ではないだろうか。

青蘿発句注解　一

The Notes of Seira's Haikus

Shizuko TOMITA

Kurinomoto Seira was a haiku poet who revived haiku in Edo period.

He was recognized to be one of the six great haiku poets, which included Yosa Buson. However, Seira was not so famous as Busonn.

Seira lived in Kakogawa, Harima Province and created the large world of haiku there. He was a competent instructor and kept a lot of influential people as pupils. The Kurinomoto clan flourished in Harima. It still remained in Meiji period.

In this Paper, I wrote the notes on the works of Seira, and appreciated them. First, I wrote the notes of his haikus. This time, I targeted his early works, which were created in the time between his youth and his settlement in Kakogawa. I wish to cover all his works in future.